

【日本の大学】第13回——早稲田大学：「在野・反骨」で私学の雄

早稲田大学は、1882（明治15）年に創設された「東京専門学校」がそのスタートである。「早稲田大学百年史」は、歴史の長さから言えば、もっと長い大学はほかにあるが、「この間よく風雪に耐えて、国内の代表大学と指目されるのみでなく、広く世界にも聞こえる学績を挙げている」と自賛し、設立者として大隈重信侯の果たした役割の大きさを挙げている。

設立は、1858（安政5）年に福沢諭吉が開いた「蘭学塾」には及ばないものの、その後の歴史の中で、私学の雄として今や「早慶」と並び称されていると言えよう。



早稲田キャンパスにある大隈重信侯像

政党と学校を設立

新政府の高官として重要な役割を担っていた大隈重信が、「明治14年の政変」で野に下り、翌15年に、政治面では立憲改進黨を立党し、教育面では、大隈の知遇を得た小野梓（大学建学の母とされ、33歳で早逝）や高田早苗（のちに国会議員、文部大臣、早稲田大学総長）らの力を借りて「東京専門学校」を設立したのがその始まりだ。現在の早稲田大学本部のある地に急ごしらえで作られた建物に、政治経済学科、法律学科、理学科の正規3科と各科の学生が選択受講する英学科が設けられて計80人の学生が集まった。

1890（明治23）年には、文学科が誕生、明治時代を代表する小説家、評論家である坪内逍遙が花形講師として登壇し、その「シェイクスピア講義」が評判を呼んだ。

創立20周年を迎える1902（明治35）年には、私立学校令に基づいて大学を称し、名称も「早稲田大学」とする旨届けを出し、9月2日付で発足した。大学部と専門部を新設して、大学部に政治経済学科、法学科、文学科を設置した。大学を自称した私立学校としては、1898（明治31）年に学制改革を実施し大学教育を本格的に始めた慶應義塾大学が最初で、早稲田大学は2番目である。

以下、早稲田大学のホームページやそこに掲載されている「大学百年史」などから、大学の歴史や現状を見ていこう。

創設者の大隈は、創立以来、政治家としての意識が強く、大学に関しては「後見人」「支援者」的な立場を取っていたが、1907（明治40）年に政党党首を離れた際、大学側は、総長職を新設し、就任を要請、同年4月に初代の総長となった。当時、学校運営は学長が担っていたため総長は名誉職だった。大隈はその顔の広さを活用して募金集めに力を入れ、09（明治42）年には宿願だった理工科（機械学科、電気学科）の再開設にこぎ着けた。



早稲田大学歴史館

「学問の独立」を宣言

1913（大正2）年、大隈総長は創立30周年記念祝典において、「早稲田大学教旨」を宣言した。これは建学理念を継承し発展させたもので、教旨は「早稲田大学は『学問の独立』を全うし、『学問の活用』を効し、『模範国民を造就』するを以て建学の主旨と為す」としている。特に「学問の独立」は「在野精神」「反骨の精神」と結び合っており、自主独立の精神を持つ近代的国民の養成を理想として、権力や時勢に左右されない科学的な教育・研究を行おうとの気概を示している。

教旨が書かれた碑文は1937（昭和12）年に大学正門前に設置され、現在に至っている。第2次大戦後、その中にあった「立憲帝国の忠良なる臣民として」との文字が「主権在民を謳った新憲法にふさわしくない」として教旨から削除された。ただ、「教旨」の碑に刻まれた語句についてはそのまま残されている。

名実ともに大学に

早稲田大学が名実ともに「大学」となったのは、1920（大正 9）年である。2 年前の 18（大正 7）年に「大学令」が公布され、20 年になって慶応義塾大学とともに私立大学として初めて認められたことによる。それまでは国が大学として「容認」していたのが、この時点でようやく「公認」されたことになる。

この時点で大学は、政治経済学部、法学部、文学部、商学部、理工学部と大学院からなり、同時に高等学院も設置されている。

その後の戦前の出来事としては、現在も早稲田の象徴となっている大隈記念講堂の落成（1927=昭和 2 年）、坪内逍遙博士記念の演劇博物館の開館（1928=昭和 3 年）などがある。現在、會津八一記念博物館となっている旧早稲田大学図書館も 1925（大正 14）年に建てられている。



早稲田大学大隈記念講堂

第 2 次大戦の際の東京大空襲によって、早稲田大学も約 3 分の 1 の校舎を消失したものの、終戦 1 か月後には講義を再開したという。

戦後の教育行政、学校制度の大転換によって、大学、専門学校、師範学校などがすべて統合再編される中で、早稲田も 1949（昭和 24）年に新制大学の設置が認可され、新たなスタートを切った。従来の学部・学科を再編して 11 の学部を設置した。政治経済学部、法学部、商学部、文学部、理工学部をそれぞれ第一と第二学部に分けた。第二学部は夜間学部である。終戦後の経済的、社会的混乱の中、勤労学生に学問研究の場を与えようとの趣旨だった。新たに発足した教育学部は 1903（明治 36）年に発足した高等師範部を改組して高等教員および教育行政家の養成が目的で、当時の私立大学にはない学部だった。



オープンキャンパス

大学院の修士課程の設置は 1951（昭和 26）年で、政治学、経済学、法学、文学、商学、工学の各研究科が置かれた。

昭和 40 年代（1965 年以降）には、夜間部としての役割はほぼ終わったとして法学部、商学部、政治経済学部、理工学部の第二学部を次々に廃止した。代わって、社会科学部が設置されている（1966 年）。また、同年には、学費値上げに反対して学生運動が盛り上がり、入学試験は実施されたものの、4 月からの授業が開始できない状態が 2 か月余り続いた。

昭和 60 年代から平成時代にかけては、時代の要請に応じる形で新たな学部や大学院の研究科の設置が相次いだ。1987（昭和 62）年には、人間科学部、次いで教育学研究科（1990 年）、人間科学研究科（1991 年）、社会科学研究科（1994 年）などが続いた。

早稲田大学のトップは、当初の「東京専門学校」時代は校長であり、初代の校長は大隈重信の婿養子だった大隈英麿が務めた後、2 代目は、日本の近代郵便制度の創設者の一人で「郵便制度の父」と呼ばれる前島密が務めた。1902 年に「早稲田大学」と改称しても、校長は 3 代目の鳩山和夫（政治家、長男鳩山一郎以下、政治家一家）が務めていたが、1907 年に、創立者の大隈重信が初代の総長に就任。総長は当時名誉職で、実務的な責任者は学長で、初代の学長は、大隈とともに東京専門学校設立を担った高田早苗が就任している。その後、学長は 4 代の塩沢昌貞まで続いた。塩沢と高田早苗はその後、総長にも就任している。



大隈庭園

現在の総長は、17 代、政治経済部畑の田中愛治氏である。田中氏は 2018 年の 11 月、法学部出身の鎌田薫氏を引き継いで総長に就任、就任に当たって、「まず取り組むべき大きな仕事は、早稲田大学を『世界でかがやく大学』にしていこうこと。そのためには前総長の下で策定された『Waseda Vision 150』を『NEXT STAGE』へと昇華させ、具体化を進めていく」と抱負を述べている。

Waseda Vision 150 は、大学創立 150 周年に当たる 2032 年に向けた中期ビジョンで、2012 年度に策定された。内容は「学生がどのような教育・研究環境の中で何を身につけ、世界へはばたくのか、その学窓と早稲田の研究のあるべき様態、そして、卒業生がどのような姿で世界のリーダーとして、あるいは地域社会を支える市民として、世界のため人のために活躍しているのか、その姿を示したもので、それを実現するために 13 の核心戦略を実行に移している。

現在、学部は政治経済、法、文化構想、文、教育、商、基幹理工、創造理工、先進理工、社会科学、人間科学（通信教育課程を含む）、スポーツ科学、国際教養の 13 学部。このうち 21 世紀に入って設置されたのは、順にスポーツ科学部（2003 年）、国際教養学部（2004 年）、2007 年には最後に残っていた第 2 文学部を再編する形で、文化構想学部を設置、同年には理工学部を基幹理工、創造理工、先進理工の 3 学部に変更した。

大学の専任教員は約 1900 人、非常勤講師なども含めると約 5500 人が教育、研究に携わっている。学生数は 40267（女子 15235）人、大学院は 8457（同 2957）人である。（2019 年 5 月現在）

また、外国人学生数をみると、私費、国費、交換留学生合わせて学部 1800 人、大学院 2616 人など計 4718 人となっている。（2020 年 5 月現在）



卒業式

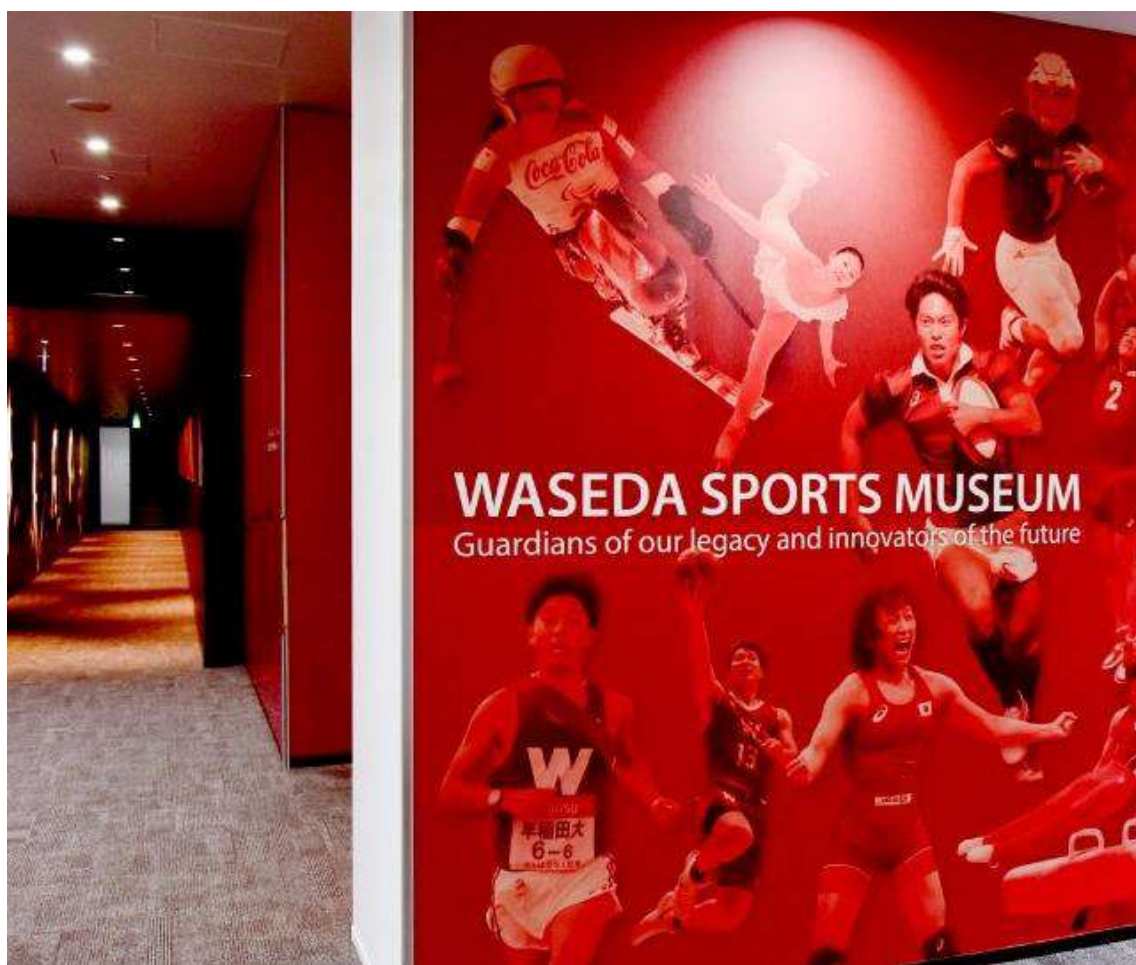
キャンパスは、創設時から中心となっている早稲田キャンパスに主要な建物が集まっているほか、戸山キャンパス（文学部、文化構想学部、早稲田アリーナなど）、西早稲田キャンパス（基幹理工学部、創造理工学部、先進理工学部など）、喜久井町キャンパス（理工学総合研究センター、多目的グラウンドなど）が比較的近辺に集まっているほか、人間科学部、スポーツ科学部などが埼玉県所沢市の所沢キャンパス、埼玉県本庄市にある本庄キャンパス、九州・福岡の北九州キャンパスなどがある。

早稲田大学には約 64 万人の卒業生（校友会会員）がおり、校友会の代議員会の場合などで話題が出るのが、医学部設置問題である。「永遠のライバル」とすら言われる慶應義塾大学と比べて、大きな差は「医学部」が早稲田にはないことだ。前総長の鎌田氏は在職時代医学部の設置について、その実現に向けて動いたようだが、結局実現しなかった。現在は、スポーツ科学部で、人間の寿命、健康などの問題について研究や実践が行われており、そうした活動を積極的に進めていく中で、医学部設置の問題も長い目で議論されていくことになるだろう。

早稲田大学の校歌「都の西北」は創立 25 周年の 1907（明治 40）に制定されたもので、

相馬御風作詞、東儀鉄笛作曲の歌だが、現在では、全国の大学の中で最も有名で人口に膾炙したものとなっている。

スポーツが盛んであり、これまでも多くの日本代表選手や五輪代表選手、メダリストを輩出している。大学野球は東京六大学のリーグ戦に属し、春秋のリーグ戦は最後に早慶戦を行うことが慣例になっており、早慶の現役学生や OBOG が詰めかけて常に満員となって盛り上がっている。



文：滝川 進

写真：早稲田大学 HP & Facebook